

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

会議をカイゼンしよう！

松田 道雄

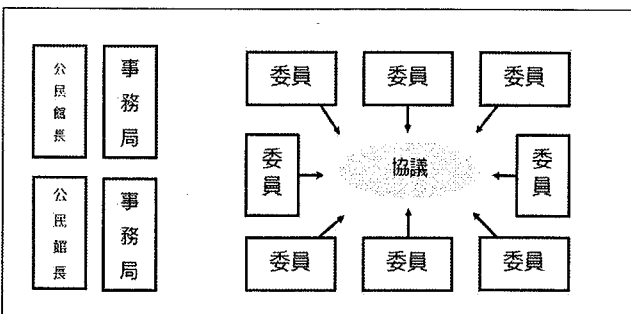
提案・提案・社会教育関係の会議の進め方をさらによ
りよく改善し、その成果を
町内会など地域社会の会議
にも広げていきましょう。

先月に続き、今月も松田が皆
さんに提案差し上げます。今回
の提案は、会議の改善です。私
たちは、職場でも地域生活でも、
さまざまな会議を経験していま
す。皆さんは、会議は好きでし
ょうか？ 会議に好きも嫌いも
なく、組織社会ではしなければ
ならないのでしているわけです
が、皆さんが参加している会議
は、もっとよりよく改善する余
地はないでしょうか？

筆者が参加している会議の中
で、会議の進め方を改善してい
る事例を紹介します。仙台市公
民館運営審議会（仙台市の公民
館の名称は、市民センター）で
す。公民館や社会教育・生涯学
習に関わる会議は、どこの自治
体でも行われていますが、仙台

市公民館運営委員会は、HPを
検索されて見ていただくかわか
りますが、毎回の会議について、
会議資料だけでなく、「会議の様
子」を写真でも公開しています。
一般に会議というと、参会者
が一堂に見え合う「口の字型」
の配置が多いのではないでしょ
うか。さらに人数が多い場合は、
議事進行者が壇上において参会者
が一堂に座る「講義型」もあり
ます。会議の自身の性質が、情
報の伝達と合意が主であれば、
このような形式でいいのではし
ょうか。参会者によって内容を深
め合う議論が求められる場合に
は、このような全体型では、一
人が話せば、他の参会者は聞く
しかないのです。聞く時間のほう
が多くなり、「深め合う議論」に
はなりません。

図1 「口」の字型の協議



よる「議論の深め合い」が求め
られます。
そこで、会議の始めは、「口の
字型」（図1）で事務局の資料説
明を全体で確認したあとに、（少
人数のグループになって討議す
ることを合意した上で）全員で
机・椅子を並び変えて、グルー
プになって討議を深め合うこと
にしました（写真1、2）。
グループによる討議は、当初、
委員だけで行っていました

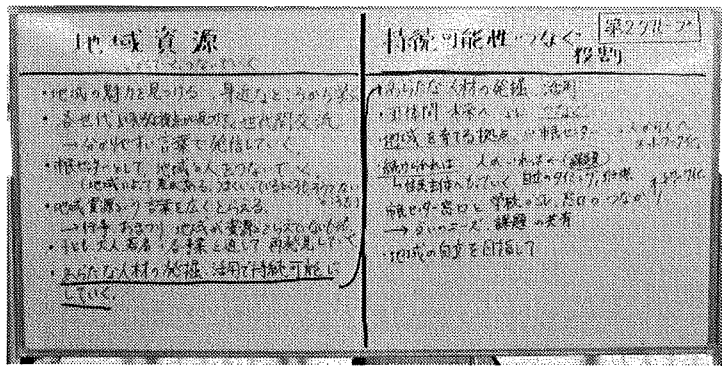


写真3 仙台市公民館運営審議会令和5年3月16日(木)定例会会議の様子
グループ討議(第2グループ結果)

考えや気持ちを安心して言える状態)を提唱した、エイミー・C・エドモンドソン著「恐れのない組織」(野津智子訳、英治出版、2021年)の中に、2011年3月の東日本大震災で福島第二原子力発電所の増田尚宏所長が、ホワイトボードを使ってリーダーシップを発揮したことが「ホワイトボードによる透

明性」という項に描写されています(ホワイトボードを活用して、タイムリミットまで2時間という危機を克服してくれた増田所長、職員の方々の献身的な努力のおかげで、私たちは今こうして暮らすことができている)。この会議で、グループ討議の内容をホワイトボードに記述してください。仙台市生涯学習支援センターや各区中央市民センターに配属されている派遣社会教育主事の方々は、学校教師の方々です。板書はお手の物でもあります。

写真の回(3月16日)の各グループの進行は、答申のまとめに向けて学識経験者である大学の先生方が担当くださりました。その前までは、進行役(ファシリテーター役)も、派遣社会教育主事の方々に担当していただきました。委員の方々は、「何とせいたくでありがたい会議だね」と談笑されますが、まさにこれが、社会教育の豊かさの

一つであり、それは他にも広めていくことができるのではないかと思います。社会教育主事がいるからできる会議は、今後、ファシリテーションスキルも含めた生涯学習支援論を修得した社会教育士によって受け継がれ、職場内外の会議はさらにより活発に改善されていくのではないかと期待されます。

社会教育からの社会貢献としてイメージしやすいのは、地域社会への貢献でしょう。どこの地域も少子高齢化で、町内会組織などの担い手不足が言われます。長老格の年配の事務局方々が、昔ながらのやり方で会議を仕切るのを続けていては、若い世代には、「堅苦しい」「面白くない」となり、ますます「会議が苦痛だから」と参加しなくなり、柔らかな発想で、参加者皆が生き生きと会議を楽しめるようなファシリテーションスキルを身につけた社会教育士が、子ども

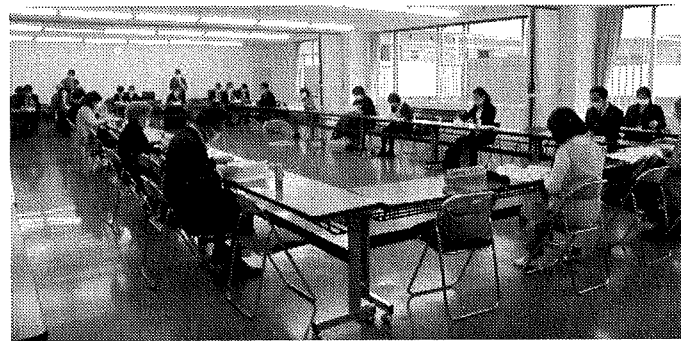


写真1 仙台市公民館運営審議会令和5年3月16日(木)定例会会議の様子
事務局資料説明

(図2)、その後、この会議に参加している仙台市各区の中央区民センター長(図の表記は公民館長)もその中に当事者として加わり、その場で現場からの意見をタイムリーに述べることで、より実情に即した議論を深めていくことができるようになりました(図3)。

ある委員の方が、「これまでたくさんの方々が参加してきたが、この会議は実に活発に話し合いができて楽しかった」と語られたことがあります。毎回のこれらグループ討議には、それぞれにホワイトボードが配置されています。議論された内容は、どんどんホワイトボードに「見える化」され、それもHPに掲載されています(写

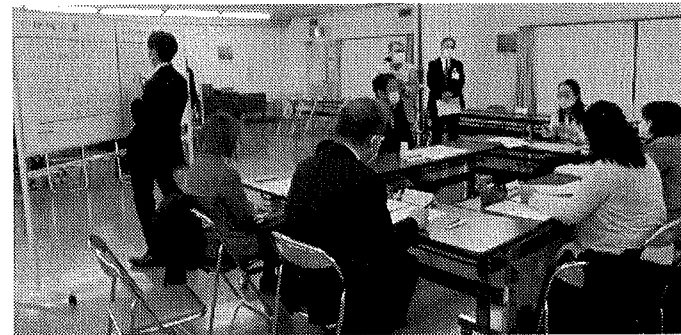
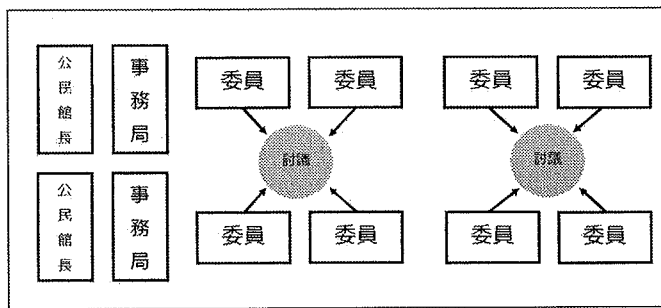


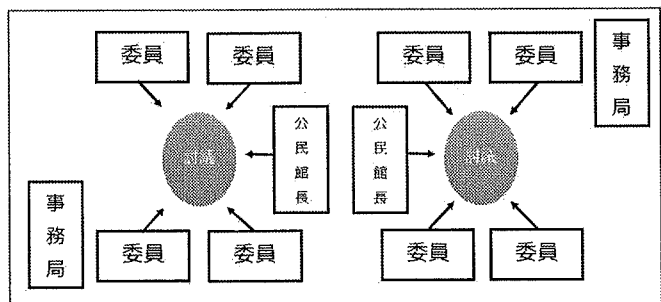
写真2 仙台市公民館運営審議会令和5年3月16日(木)定例会会議の様子
グループ討議(第2グループ経過)

図2 グループ討議



真3)。それぞれのグループでどのような話し合いが行われたのか、インターネットを通して、誰もが知ることもできるのです。公民館運営審議会は、公開が原則になっていますが、平日の日の会議を傍聴できる市民の方はそういらっしやいません。また、議事録も公開されていますが、こまかな文章を読む市民の方はほとんどいないのではない

図3 当事者も参加したグループ討議



でしょうか。むしろ、このように、HPにホワイトボードの中身まで読める写真を掲載することで、市民にとっては「より手軽に会議が臨場感を持って公開されている」ことになっているのではないのでしょうか。ホワイトボードを活用する重要性については、最近よく職場研修テーマにもなっている「心理的安全性」(組織の中で自分の